

〔報告〕

キーワードを活用した授業による学びの分析
ーセルフマネジメント能力の育成を目指してー

池 西 悦 子 宮 本 千津子 林 由 美 子
上 野 美智子 奥 井 幸 子

A Study on Learning Keywords in Self-management Class

Etsuko Ikenishi, Chizuko Miyamoto, Yumiko Hayashi,
Michiko Ueno, and Yukiko Okui

はじめに

看護学教育においては、学生が専門職として生涯にわたり自己の能力を開発・発展させ、かつその基盤となる人としての成長・成熟を目指すためのセルフマネジメント能力を育むことは重要な目的である。

本学では、1セメスターの機能看護学概論にこの学習を位置づけている。

セルフマネジメントという概念は、その定義も一般化されたものではなく、看護基礎教育の中で授業として取り上げるのは初めての試みである。そのため、これから我々が実感できる概念枠組みを共に構築していく段階にあった。そして、教育方法も既成の概念を知識として授与するのではなく、セルフマネジメントを学習するための主要概念をキーワードとして提示し、担当したキーワードをグループワーク中心に主体的に学習する方法を採用した。

初めての試みであることから、その過程において学生も教員もどのようにすすめていけばよいのかという困難や葛藤を感じていた。しかし、文献検討や体験を通したディスカッションを行う中で、個々の学生が確実に何かをつかんでいったという印象をもっている。

そこで、機能看護学概論において、キーワードを課題として持ち学習することで、どのような学びがみられたのかを明らかにするため、本研究に取り組んだ。

I. 研究目的

本研究は、G看護大学1年次生がセルフマネジメントの学習において、キーワードを課題として持ち学習することで、どのような学びがみられたのかを明らかにすると共に、今後の教育方法の示唆を得る事を目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

本研究の対象は、G看護大学において平成12年度に開講された機能看護学概論を受講し、導入実習で機能看護学が担当した学生のうち、研究協力に同意の得られた22名である。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成12年11月～12月であり、調査方法は、自由回答式質問紙調査とした。

3. 調査内容

調査内容は、①講義・グループワークで学習したセルフマネジメントやキーワードについて、導入実習での体験とつながり理解が深まったと思うこととそのきっかけについて、②日常生活や他の授業の中でセルフマネジメントもしくはキーワードについて思い出したり、意識すること、③キーワードについて学習したことおよび導入実習を経験したことはどのような意味があったと思うかであった。

4. 分析方法

まず、対象の記述内容を熟読し、キーワードの活用と学びとの関係に着目してコード化した。

次に、記述内容を理解が深まったきっかけとコードの関係から、学びのパターンに類別した。

最後に、類別したパターンごとに、概念活用の視点から学びの特徴を解釈した。

以上の分析は、質的研究の経験者を含む共同研究者の合議により行った。

5. 倫理的配慮

本研究の調査協力についての依頼は、条件に該当する学生に掲示により授業時間外に集合してもらった。

集合した学生に対して、研究の目的を含む概要、データを研究の目的以外に使用しないこと、データの扱いに関する匿名性の保障、同意の有無が学生生活に影響しないことの保障について説明を行った。

その上で、同意が得られた対象者に対して、指定期間内に所定の場所に調査用紙を提出してもらった。

Ⅲ. 機能看護学概論の概略

1. 機能看護学概論の目的

人として、看護専門職として、生涯にわたり自己の能力を開発・発展させることを出発点として、看護の発展及びその社会化に貢献できる能力を身につけるため、まず、その出発点であるセルフマネジメントについて学習することとした。

2. 学習内容と方法

学習方法としては、講義、グループワーク、導入実習があった。

講義においては、看護を大学で学ぶ意味、教養教育の意味などの看護学士課程で求められている能力と大学で看護を学ぶ自己が認識できるような内容を開講早期に実施した。そして、看護専門職の理解や看護学を学問として学ぶという内容については、2度目の導入実習の前に実施した。

グループワークにおいては、セルフマネジメントを学ぶキーワードとして、価値観、人間観、健康観、意思決定、責任、自律、自治の7つの概念を提示し、そのうち1～2個のキーワードを各学生が担当するようにグループに配分した。準備段階では、国際化を視野に入れた教

育を目指しているため、世界観もキーワードとして考えていたが、本年度は学生のレディネスを考慮して、以上の7つのキーワードを提示した。

このグループワークは、発表を含め6回行ったが、その間に2回の導入実習が組まれていた。

導入実習前のグループワークでは、主に文献検討を中心としたディスカッションから学習を進め、導入実習後は、実習での体験を想起しながら、キーワードについて再度検討を行った。

導入実習は、「入学早期の段階で、保健、福祉、医療の様々な場における看護職の活動の現状を知ることを通して、看護に対する基本的な理解を深める」ことを目的として、実際に看護実践の現場で看護に触れる体験をした。

機能看護学概論では、看護実践の場である「実習現場において学生が見、聞き、感じて、考えたことを自分の言葉で表現する」ことをねらいとして取り組んだ。

以上のような方法で、講義⇒グループワーク⇒導入実習⇒講義・グループワーク⇒導入実習⇒グループワーク⇒まとめへとすすめていった。

Ⅳ. 結果

対象の記述内容を、理解が深まったきっかけとキーワードの活用方法の観点から分析した結果、5つの特徴的な学びのパターンが抽出できた。

1. キーワードを念頭においた観察と分析から解釈に確信をもてたパターン

このパターンは、表1に示したように、「実習に行く前・・・文献を調べたり、みんなで話しあう中で知っていた（1-a）」のようなく実習前に行ったキーワードについての解釈を視点にして、「看護婦の日常生活援助をするとき・・・という行動を見て、理解が深まりました・・・（1-b）」ようにく現象の意図的な観察を行っていた。そして、「患者はいつも不安でそれを隠している（1-c）」というく観察内容の分析によるキーワードの具体化を行っていた。

さらに、「実際に目の当たりにするとそれは確信につながるものとなりました（1-d）」というくキーワードの解釈に対する確信へと至っていた。

対象は、この学習経験を振り返って、「実際の現場と

表1 キーワードを念頭においた観察と分析から解釈に確信がもてたパターンの記述の1例

学生の記述（導入実習で理解が深まったと思うこと・授業および実習経験の意味）
私は実習に行く前に、人間観について調べるグループで看護婦の患者に対する人間観を話し合っていました。（1-a）そして、実際に看護婦がどんな人間観をもっているのか、実習を通して知りました。それは「患者はいつも不安でそれを隠している」という人間観（1-c）でした。これは文献で調べたりみんなで話しあう中で知ってはいた（1-a）のですが、 <u>実際目の当たりにするとそれは確信につながるものとなり（1-d）</u> しました。
看護婦の日常生活援助をするときにでも、絶えず声かけをして精神的なケアをして、表情を読み取るという行動を見て、 <u>理解が深まりました。ただ単にデータだけを集めて記録を取るのではなく、顔色を気にしてからだの調子を読み取っていました。不安で心が病人でいるという患者だから患者の不安を軽減し、安心感を支えていたのだと思う（1-b）。</u>
導入実習は、 <u>実際の現場ということで、今後のやる気につながるし、キーワードに当てはまるが多かったので、とても意味のあるものでした（1-e）。</u>

表2 実習後に行ったキーワードについての再検討により実習体験の新たな意味を見いだしたパターンの記述の1例

学生の記述（導入実習で理解が深まったと思うこと・授業および実習経験の意味）
車いすにのった女性のお年よりがいた。私は入浴する前に衣服の着脱を手伝おうと思い、そのお年よりの横に立っていた。すると、 <u>介護士さんが「このおばあちゃんは自分で服を脱いだりできるんだけど、自分の視線の中に誰かいるとそ</u> <u>の人にできることなんだけど、手伝ってと頼んでしまうの。家族の方からなるべく自分でやらせてほしいといわれているから、後ろの方から見て」と言われた（2-a）。</u>
介護士さんに言われたときはできることはやらせてできないことを手助けしていくということが大切なんだということだけしか思わなかった（2-b）けど、7月の導入実習の自律のグループのプリント（事例②）を読んで（2-c）、5月の導入実習で私が体験したことは、自律に関係しているんだなあとと思った。できることをやらせてできないことを手伝ってあげることが残存機能の存続であり、自律につながると思った（2-d）。今ある機能を使ってできることはしていき、自律をうながしていくことが大切（2-e）だと思った。
実習に行って、実際に看護を見て、体験することによってキーワードやセルフマネジメントについて少しずつ理解できるようになるのではと思った（2-f）。

ということで・・・キーワードに当てはまるが多かった
ので、とても意味あるもの（1-e）」と認識をしてい
た。

以上のように、実習前に行った解釈を念頭において観
察と分析をすることで、キーワードの解釈に確信がもて
たパターンであった。

2. 実習後に行ったキーワードについての再検討によ り実習体験に新たな意味を見いだしたパターン

このパターンは、表2に示したように、「『・・・自分で
やらせてほしいといわれているから、後ろの方から見て
て』と言われた（2-a）」などの＜実習体験＞を通し
て、一旦は「・・・できないことを手助けしていくとい
うことが大切（2-b）」などの＜体験の解釈＞をしてい
た。しかし、その後「自律のグループのプリント（事例
②）を読んで（2-c）」などの＜キーワードを再検討
する機会＞により、「私が体験したことは、自律に関係
しているんだなあとと思った。・・・できることはやらせて、

できないことを手伝ってあげることが残存機能の存続で
あり、自律につながる（2-d）」などの＜再検討した
キーワードを用いた体験の新たな解釈＞を見いだしてい
た。

そして、「・・・自律を促していくことが大切（2-e）」
と＜キーワードの看護における意味づけ＞を行っていた。

さらに対象は、この学習経験を振り返って、「実際に
看護を見て、体験することによってキーワードやセルフ
マネジメントについて少しずつ理解できるようになる
のでは（2-f）」と認識していた。

以上のように、実習後にキーワードを再度検討する機
会を通して、実習体験の新たな意味に気づき、キーワ
ードの実感ある理解ができたパターンであった。

3. 現象の意味づけにキーワードを活用し、キーワ ードを持つことの意義を認識したパターン

このパターンは、表3に示したように、「赤ちゃんに
とってストレスを感じない環境を作っていたり・・・、1

表3 現象の意味づけにキーワードを活用し、キーワードを持つことの意義を認識したパターンの記述の1例

学生の記述（導入実習で理解が深まったと思うこと・授業および実習経験の意味）
<p>赤ちゃんにとってストレスを感じない環境を作っていたり、赤ちゃん1人に看護婦が1人ついてケアを行っていました。また、申し送りなどで看護婦同士の情報交換を行っていたり、毎回、1つの課題をあげてみんなで解決策を考えたりしているのを見て（3-a）、NICUの中での独自の規則や環境が（3-b）自治につながるなと思いました（3-c）。また、看護婦自身それぞれ自分の信念みたいなものをもっていて、それが価値観につながるなと思いました。キーワードについてあてはめて考えると、それまではなんとも思っていなかったことがちゃんとした意味をもった行動や考えであるのだなと新たな発見につながった（3-d）のでよかったと思います。</p>

つの課題をあげてみんなで解決策を考えたりしているのを見て（3-a）」などの＜現象の観察＞から、「・・・の中での独自の規則や環境が（3-b）」などの＜現象の看護における意味の分析＞をおこない、「自治につながるとなりました（3-c）」のように＜現象の意味を表現するためのキーワードの活用＞を行っていた。

さらに、この学習経験を振り返って、「キーワードについてあてはめて考えると、それまでなんとも思っていなかったことがちゃんとした意味を持った行動や考えであるのだなと新たな発見につながった（3-d）」と認識していた。

以上のように、観察した看護現象の意味を表現しようとしてキーワードが活用できること、そしてキーワードを活用することで現象に新たな意味を見いだすことができることに気づき、キーワードを持つことの意義を認識

できたパターンであった。

4. 実習体験から自己の既成の概念理解を振り返り、概念の意味を再構成したパターン

このパターンは、表4に示したように、「子供達と一緒に遊んだこと・・・実際に遊んでいてすごく楽しかったし、皆と遊べた。（4-a）」という＜実習体験＞により、「日常生活の中で、車椅子の人を見かけたり、・・・偏見という目ではなくとも、自然と目で追ってしまう（4-b）」というこれまでの＜自己の既成の概念理解に起因した行動の振り返り＞や「それは・・・障害者は障害者、健常者は健常者という隔たりが生活環境の中でできあがってしまっている・・・（4-c）」という＜既成の概念理解が形成された根拠の分析＞を行っていた。

そして、「障害者＝健康ではないと思っているのではないか、それは明らかに間違った考え方で・・・（4-d）」

表4 実習体験から自己の規制の概念理解を振り返り、概念の意味を再構成したパターンの記述の1例

学生の記述（導入実習で理解が深まったと思うこと・授業および実習経験の意味）
<p>この導入実習では私自身の中で「健康観」について深まった。普段生活をしている環境、一般に言う日常生活の中で、車椅子の人を見かけたり、装具をつけている人を見かけると、偏見という目ではなくとも、自然と目で追ってしまう（4-b）。それは、障害者は障害者、健常者は健常者という隔たりが生活環境の中でできあがってしまっている。いたるところに階段、段差があったり、車椅子では通行できない幅の道など、障害になるものが多すぎて、障害者の方が外出しにくい環境になっているため、健常者も障害者と接することに慣れておらず、何となく同情を感じてしまっている（4-c）。健常者の中では、自分たちの日常生活環境では十分に生活できない障害者＝健康ではないと思っているのではないか。それは明らかに間違った考え方（4-d）で、希望が丘学園では、不自由はあっても、みな元気で走り回ったり、キャッチボールをしたりなど、普通に生活していた。車椅子ではなく、装具もつけていない、目も見えないし、耳も聴こえないといった、一般に健常者と呼ぶ人たちは、「人口の大半を占めている」だけであって、健康というわけではない。また、逆に障害者と呼ばれる人たちは「人数が少ない」だけであって不健康ではない（4-e）。</p> <p>希望が丘学園で、子どもたちと一緒に遊んだこと（4-a）が、「健康観」を理解することによって一番つながったと思う。小学校1年生と6年生の子が一緒に遊ぶときにどちらも愉しく遊べるようにルールを変えることは当然のことで、それが障害者にもあてはまるのだということを実感した。実際に遊んでいてすごく楽しかったし、皆と遊べた（4-a）。このことによって「健康観」が私の中ですごくはっきりしたものになった（4-f）。</p> <p>この導入実習で希望が丘学園にいったことは、自分にとってすごくプラスになった。自分の中で、勝手に偏見を抱いていた。今それを思う。全く意味がなくつまらないことだと思う。それに気づけたことは良かったと思う（4-g）し、頭の中では理解していたつもりだった「障害は病気じゃない」ということが実際に障害者と接することで実感でき（4-e）て、理解が深まったと思う。</p>

や、「不自由はあっても・・・普通に生活していた・・・、障害は病気じゃない（4-e）」などの＜概念の意味の再構成＞を行っていた。そして、実習で体験したこの概念が学習していたキーワードであったことによって、『健康観』が私の中ですごくはっきりしたものになった（4-f）」のように、キーワードの理解を深められたという実感へと至っていた。

対象は、この学習を振り返って、「自分の中で、勝手に偏見を抱いていた・・・それに気づけたことは良かったと思う（4-g）」という認識をしていた。

以上のように、実習体験をきっかけとして、自己の既成の概念理解が誤りであったと気づくだけでなく、キーワードの意味の再構成に至ったパターンであった。

5. キーワードに基づいた事象の理解を他の授業や日常生活での経験において再現していたパターン

このパターンは、表5に示したように、「・・・自分の基礎体温を測ったり、3日間の食事記録をつけたり・・・、そのときに栄養がかたよっていたり、寝不足だなと思うと改善していこうと思う（5-a）」などの＜他の授業での経験＞をきっかけにして、「セルフマネジメントにつながっているかなと感じ（5-b）」、「自分で自分の健康管理をすることにおいて責任につながる（5-c）」などの＜セルフマネジメント、キーワードの具体例の理解＞を見だし理解していた。また、「健常者が障害者に対して目を向けていると（5-d）」などの＜日常生活での経験＞により、「日常生活で健常者と障害者が共に生活することができていない・・・もっと触れ合う場を作るべき・・・（5-e）」などの＜キーワードに関連した現状の問題と課題の認識＞に至っていた。

以上のように、他の授業や日常生活での経験においても、キーワードに基づいた事象の理解を再現していたパターンであった。

V. 考察

結果に示した5つの学びのパターンは、概念の活用について以下のような特徴が見られた。

まず、キーワードを念頭においた観察と分析から解釈に確信がもてたパターンである。このパターンは、キーワードの解釈を確認するために、＜実習以前に行ったキーワードについての解釈＞を視点として活用し、解釈の確信に至ったことから、「キーワードの解釈を確認するための概念活用パターン」と分析できた。

そして、実際の現場で「キーワードに当てはまる事が多かったので、とても意味あるもの」と認識していることから、実際の現場でキーワードが現象を捉える視点として活用でき、それによりキーワードの解釈を確信したことで、キーワードが看護を見る視点として覚える知識ではなく、使える知識であると確認するに至ったと分析できる。

2つめは、実習後に行ったキーワードの再検討により実習体験に新たな意味を見いだしたパターンである。このパターンでは、いったんは体験内容の解釈をしていた。しかし、その後キーワードを再検討する機会により、過去の体験が想起され、概念に基づいた解釈をすることで体験の新たな意味が発見できることに気づいていた。このことから、「体験の意味を発見するための概念活用パターン」と分析できた。

そして、このような実習体験があったことで、体験の新たな意味を発見し概念の実感ある理解につながったことから、体験の重要性を認識するに至ったと考えられる。

3つ目は、現象の意味づけにキーワードを活用し、キーワードを持つことの意義を認識したパターンである。このパターンでは、実習で観察した現象から看護における意味を分析し、現象の意味を表現するためにキーワードを活用している。観察した現象からだけでは、「独自

表5 キーワードに基づいた事象の理解を他の授業や日常生活での経験において再現していたパターンの記述の1例

学生の記述（導入実習で理解が深まったと思うこと・授業および実習経験の意味）
<p>育成期の中で、自分の基礎体温を測ったり、3日間の食事記録をつけたり、1日の記録をつけたりするので、そのときに栄養がかたよっていたり、寝不足だなと思うと改善していこうと思う（5-a）ので、セルフマネジメントにつながっているかなと感じ（5-b）ますし、自分で自分の健康管理すること（5-a）において責任につながるなと思いました（5-c）。</p>
<p>健常者が障害者に対して目を向けていると（5-d）、まだまだ日常生活で健常者と障害者が共に生活することができていないと思って、もっと触れ合う場をつくるべきだし、偏見がない環境にしていきたいと思う（5-e）。</p>

の・・・』としか表現できないが、現象と概念を相互に照合し、概念を活用すると現象の意味が上手く表現できることを認識している。

このパターンは、概念と現象と相互に照合する思考によってその関連性が確認されていることから、‘関連する現象と照合する概念活用パターン’と分析できた。

そして、現象を概念で表現することの有用性や、概念が様々な現象に活用できることを認識するに至ったと考えられる。

4つ目は、実習体験から自己の既成の概念理解を振り返り、概念の意味を再構成したパターンである。このパターンでは、実習体験そのものが振り返りのきっかけとなり、自己の既成の概念理解や行動の振り返りを行っている。その振り返りは、誤った概念理解を形成したと思われる原因にまで及んでいた。そして、その既成の概念理解が偏見であったことに気づき、概念の意味を再構成していることから、‘既成の概念理解を分析するための概念活用パターン’と分析できた。

そして、意味を再構成した概念がキーワードでもあったことから、キーワードの実感ある理解に至ったと考えられる。

最後は、キーワードに基づいた事象の理解を他の授業や日常生活での経験において再現していたパターンである。

このパターンでは、1～4の概念活用パターンに見られるような概念と体験を結びつけた学習を経験することをきっかけにして、他の授業や日常生活での体験を概念と結びつけるという理解の仕方を再現していた。このことから、‘学習を再現するための概念活用パターン’と分析できた。

以上のことから、概念活用のパターンは、キーワードの解釈の確認、体験の意味の発見、関連する現象との照合、既成の概念理解の分析、学習の再現という特徴ある学習を導くものであったといえる。

また、概念を活用し学習することは、次の2つの視点からも学びに貢献をしていると考えられる。

まずは、抽象的概念を駆使して、人に関わる複雑な現象を把握し理解していくという、学問として看護を学ぶために不可欠な能力の育成に関わる貢献について述べる。

キーワードが看護を見る視点として活用できるという

ように、概念が実用性を伴うものであるという理解は、概念が形式的に棒暗記されるもの¹⁾としてではなく、看護に使えるものとして学ばれるということであると考えられる。また、概念を用いたことによって、実習や過去の体験の意味を発見することも、概念が抽象的な言葉として理解されることを防ぎ、さらに概念の理解を深めるものとする。

一方、体験を説明するために概念を活用することは、活用できる概念を増やしておくことの必要性を気づかせることにつながったのではないかと考える。今後、対象は、さらに多くの経験をし、授業を通して新たな概念を学んでいく。その初期の段階において、概念とこれを用いた学習の楽しさと意義を体験したことは、決して容易ではない概念を前向きに学んでいく動機となると考える。

‘関連する現象と照合する概念活用パターン’では、現象を概念で表現することにより、その現象に注意払うことができるようになり、単に見たことを説明するだけでなく、諸事象の関係性を浮かび上がらせることができる²⁾ことを示している。これにより、概念の枠組みがさらに整理され、再構成されていく。このような学び方は、教師の提供した知識を一方的に鵜呑みにする丸暗記とは異なり、頭の中で問いを発しながら再構成していく真の理解をもたらすと考えられる。

‘キーワードの解釈を確認するための概念活用パターン’では、視点を定めて現象を観察することは、同じ現象を観察しても見る視点によっては異なる解釈が可能となるという気づきをもたらしている。

そして、‘体験の意味を発見するための概念活用パターン’でこれまで見えていなかった現象の意味が見いだせたことや、‘既成の概念理解を分析するための概念活用パターン’で概念が再構成できたことも、「視点の変化」すなわち、「問題を捉える枠組みの変化」が起こっているからであると考えられる。どちらのプロセスも、今回は意図的ではなかったと考えられるが、これらのことが意図的に行われることによって、1つ1つの体験から多くの視点で解釈ができるだけでなく、過去の経験からも新たな意味が見いだせることにつながると考えられる。

次に、セルフマネジメントを学ぶ上での態度を育成するという視点から、概念活用の貢献について述べる。

1つ1つのキーワードの理解はもとより、概念を用い

た思考は、自らを多様な視点から振り返り、体験と照合させながら、理念に基づくセルフマネジメントを可能とすると考えられる。このような思考は、解決できない問題に直面した時、自己のあり方を熟考し、問題の捉え方を変える事で、解決可能な問題に立て直す「リフレクション」という思考につながると考えられる。

リフレクションは、科学技術の合理的適用ではなく、総合的な知識を活用し、問題を解決可能な問題に再構築して解決していく思考であるといわれている³⁾。看護専門職として、セルフマネジメント能力を身につけ、自ら問題を再構築し解決していくためには不可欠な思考であると考えられる。

以上、本研究では、機能看護学概論において学内演習と実習とを結びつけるために行ったキーワードを用いた学習の意義を示すことができた。

本研究の対象は22名と少なく、自由記述形式の調査方法を採用したため、学生が意識していない学びは表現されていない。したがって、今回取り出された5つのパターンは、1人につき1つではなく、実際には学生の中に複合して体験されたものと考えるのが自然であろう。

表現された体験からは、＜学習を再現するための概念活用パターン＞にみられるように、授業後も様々な経験をセルフマネジメントやその主要概念に結びつけ、その意味をさらに再構成させている様子を見いだすことが出来た。このことは、対象がこの学びを今後自分にとって必要なものと認識していたことが影響していると考えられる。与えられてこなしていく課題とか、単なる知識の獲得と捉えるのではなく、人として、自分づくりとしての学習になるのではないかと考える。

今後は、対象数を増やすと共に、インタビューを通して学習者の学びの実態により接近した調査を重ねることで、セルフマネジメントの実践でもある主体的な学習を支援する教育方法の検討を重ねていきたいと考える。

VI. 結論

本研究は、G看護大学1年次生がセルフマネジメントの学習において、概念を活用することでどのような学びをしているのかを明らかにし、今後の教育方法の示唆を得ることを目的として取り組んだ。その結果、5つの概念の活用パターンが見いだせ、キーワードの実態の確

認、体験の意味の発見、関連する事象との照合、既成の概念理解の分析、学習の再現という特徴ある学習を導くものであることが明らかとなった。

そして、概念を活用し学習することは、学問として看護を学ぶために不可欠な能力の育成および、セルフマネジメントを学ぶ上での態度を育成することにつながるということが明らかとなった。

以上のことから、概念を活用し自らの体験を結びつける教育方法は、今後学生が人として、看護者として成長することの支援につながる事が確認できた。

引用文献

- 1) 中村和夫：ヴィゴツキーとルビンシュテイン、思考の文化－歴史的理論批判－；92、ひとなる書房、1986.
- 2) Anselm Strauss：Basics of Qualitative Research 1990, 操華子 他訳、質的研究の基礎 グラウンデッドセオリーの技法と手順；59～60、医学書院、1999.
- 3) Donald A. Schon：The Reflective Practitioner. Basic Book；181、1983.

(受稿日 平成13年2月23日)